

九体阿弥陀堂と釈迦堂の金具

—京都市指定文化財「鳥羽離宮金剛心院跡出土品」から—

<http://www.kyoto-arc.or.jp>

(公財)京都市埋蔵文化財研究所・京都市考古資料館



写真1 鳥羽離宮金剛心院跡出土 鴛鴦文框金具

2017年3月、「鳥羽離宮金剛心院跡出土品」が京都市指定文化財となりました。鳥羽離宮金剛心院は、平安時代後期、晩年の鳥羽法皇が鳥羽離宮内に建立した仏寺です。京都市指定文化財となった324点のなかから、仏堂の内部を飾っていた素晴らしい金具2点を紹介しましょう。

写真1は建物に付けられる装飾用の金具で、全体に鍍金が施されています。魚々子地に、小さな鑿を銅板に連続して打ちつける「蹴

彫」の技法で、羽を広げて向かいあった愛嬌のある表情の2羽の鴛鴦を描いています。長く伸びた尾羽根は金具の外周をめぐり、宝相華に似た意匠となっています。縦12.2cm、横25.7cm、厚さ1mm程度の薄い銅板で、片側を欠損しています。6箇所釘穴があり、そのうちの3箇所には釘が残っていました。この金具は須弥壇の框に打ち付けられていた飾金具と考えられます(写真3・左)。1985年に実施した発掘調査で、金剛心院の

九体阿弥陀堂に推定される建物跡から出土したものです。

写真2は仏堂の天蓋に吊り下げられた瓔珞と推定されます(写真3・右)。四角形の金具の四隅に宝相華を配置し、中央の蓮華との間を唐草で繋いだ意匠で、中央にガラス玉をはめ込んでいます。一辺約12cmの正方形で、厚さは約5mmあり、鑄造品の可能性があります。わずかに鍍金が残る箇所があるので、かつては全体が金色に輝いていたものでしょう。中央のガラス

玉は風化して灰色になっていますが、風化部が剥落した箇所^①に光を透すと、この玉が、かつては鮮やかな緑色を呈していたことがわかります。四隅に小穴があるのは、瓔珞どうしを繋ぐ銅線を括^②るためのもの、上下の穴の少し横に別の小穴があるのは、ここに別の瓔珞を垂下させていたのでしょう。指定遺物のなかには中央に穴があるガラス玉数点も含まれており、瓔珞どうしを繋ぐ銅線にはガラス玉が連ねられていたと想像できます。他に例を見ない大きな瓔珞で、法皇の建築にふさわしい堂内荘厳を彷彿とさせます。1983年に実施した発掘調査で、釈迦堂に推定されている建物跡に隣接する池跡から出土しました。この瓔珞は、釈迦堂の堂内を飾っていたものでしょう。『台記』久寿元年（1154）七月三十日条は、釈迦堂が「華美」「華麗」であり、鳥羽法皇の感心すること甚だしかったと伝えています。

鴛鴦文の框金具は九体阿弥陀堂という長大な建物の須弥壇に付けられていたわけですから、他にもたくさんあったはずですが、釈迦堂



写真2 鳥羽離宮金剛心院跡出土 瓔珞

の瓔珞にいたっては、数百枚に及んだことでしょう。金剛心院跡の発掘調査は広い面積に及んでいるのに、これまでの出土例は紹介した1枚ずつにとどまり、あまりに少ないのです。何故でしょう。

金剛心院は鎌倉時代に儀式が行なわれたのを最後に記録の上から姿を消します。伽藍が荒廃してゆ

く過程で、残されたおびただしい金具類は京内の金工業者などの手によって地金として回収されていった、と考えるてみてはいかがでしょうか。法皇の建築を飾った金具類は、新たな金具に姿を変え、再び別の荘厳として生まれ変わっていったのかもしれませんが。

（内田好昭）

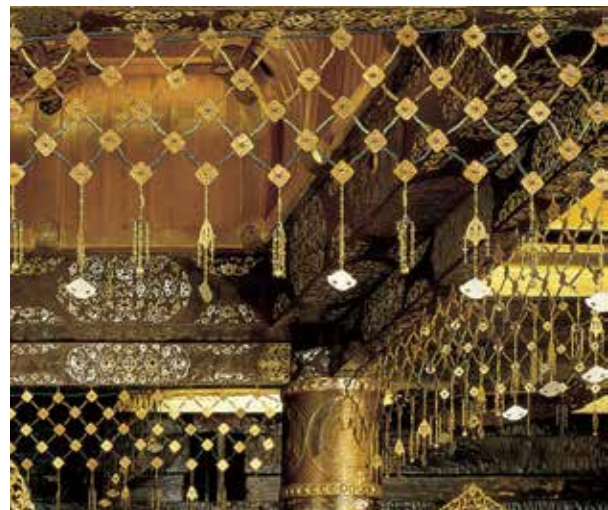


写真3 中尊寺金色堂 須弥壇の框金具（左・矢印）と天蓋の瓔珞（右）（写真：中尊寺提供）